

宮川流域の「かんこ踊り」の継承について

1 宮川流域のかんこ踊りとその歴史

「かんこ踊り」は腰または胸の前に羯鼓(かっこ/かんこ)をつけてバチで打ち鳴らしながら踊るので、「かんこ踊り」と呼ばれ、「羯鼓踊/羯鼓踊」とも記載される。三重県や滋賀県などに「かんこ踊り」と呼ばれる踊りが継承されている。三重県では、南勢、中勢、伊賀、北勢に分布している(資料1)。かんこ踊りは新盆供養・先祖供養や豊作・住民の安寧・雨乞いなどを祈願する踊りとして継承されてきた(資料2、資料3)。また、かんこ踊りは宗教行事であるとともに、住民の娯楽的な側面を持つ(資料4、p.4、「円座の羯鼓踊の演目と音頭」を参照)。

宮川(三重県南部を流れ、清流で知られる1級河川)流域のかんこ踊りは、度会町麻加江(まかえ、資料5)、伊勢市円座町(えんざちょう、資料6)、佐八町(そうちちょう、資料6)、小俣町(おばたちょう、資料7)中小俣・下小俣などで行われてきた。かんこ踊りは多くの地区で、8月の盆の時期などに実施されている。円座町では、太平洋戦争前まで、踊り手は世襲制で各戸の長男のみが踊り、音頭(おんど)は門外不出で、町外への流出を避けるため、すべて口伝(くでん)で継承されてきた(資料2)。これは他の地区でも同じで、度会町麻加江では、練習も人里離れた所で行ったと伝えられている(資料5)。現在は、男子の長男のみの制限はないが、成人女子は踊りに参加していない。

円座町のかんこ踊りの起源(『伊勢市史』、資料8)は江戸時代の慶安(けいあん、1648年～1652年)ごろと言われている。また、「一説には天正年間(1573年～1592年)ともいわれる」との記載があるが、文献は示されていない。かんこ踊りは頭にシャグマ(赤熊)を被り、腰に腰蓑(シモタという)を着けた姿から、南洋などの「外来起源説」があるが、根拠は全くない(資料9)。(シャグマを頭に被らないかんこ踊りもある。)

円座町の隣の伊勢市上野町、津村町などでもかんこ踊りがあったといわれているが、残念ながら、廃(すた)れてしまい現在は行われていない。資料8の注2によると、伊勢市津村町では昭和36年(1961年)までかんこ踊りが行われたと記載されている。(以下、伊勢市矢持町在住の中瀬誠一氏談)矢持町の(旧)菖蒲村では、かんこ踊りを二十日(はつか)盆として、8月20日に行っていたが、明治の中頃に途絶えた。また、(旧)床ノ木(いすのき)村では、かんこ踊りを昭和30年頃まで行っていた。

度会町麻加江のかんこ踊りは昭和34年(1959年)から中断したが、昭和47年(1972年)に復活し、今に至っている(資料5、p.1)。

円座町のかんこ踊りは、太平洋戦争の戦時中には踊り手不足のため、一時途絶え、昭和36年(1961年)までかんこ踊りは実施されなかった。円座町のかんこ踊りは廃絶の危機にあったが、(故)森 茂氏(元「円座町羯鼓踊保存会」会長)を中心に、円座町民は途絶えていたかんこ踊りを復活させるために「円座町羯鼓踊保存会」を昭和37年(1962年)に設立した。「円座町羯鼓踊保存会」はそれ以来、新たな歩みをスタートし、現在に至っている。円座町のかんこ踊りは円座町の人々の熱意と努力によって、現在400年近く継承されている。

「円座の羯鼓踊」と「佐八の羯鼓踊」はともに、1964年10月16日に三重県無形民俗文化財に指定された(資料10)。

伊勢市佐八町のかんこ踊りは新型コロナウイルス感染症による公演自粛および指導者・踊り手不足のため、ここ数年、残念ながらかんこ踊りは実施されていない(2024年も行われていない)。早期の再開が強く望まれる。



①円座町のかんこ踊り



②度会町麻加江のかんこ踊りの練習
(踊り手と音頭の方々、2024年8月11日)、
麻加江公民館前庭(会場の慶林寺隣り)

③伊勢市小俣町下小俣のかんこ踊りの練習
(踊り手と音頭の方々、2024年8月12日)、
下小俣公民館前庭



2 宮川流域のかんこ踊りの継承

前述のように、伊勢市佐八(そうち)町のかんこ踊りは指導者・踊り手不足のためここ数年、残念ながら実施されていない。300年以上も続いてきた「佐八の羯鼓踊」(資料8『伊勢市史』、p.530)は「円座の羯鼓踊」と同時に三重県無形民俗文化財に昭和39年(1964年)に指定され、伝統のある民俗行事として高く評価されてきた。近隣の伊勢市上野町、津村町、矢持町のかんこ踊りはすでに数十年前に廃れてしまっている。

現在、核家族化、少子高齢化によって、どの地区においても伝統の継承が危うくなっている。三重県の宮川流域でかんこ踊りが行われている地域の人口減少は近未来に加速度的に進行するのは確実である。400年近くも続いてきた「円座の羯鼓踊」も例外ではなく、他の地域でも続いてきた伝統を今後さらに100年以上継承していくのは「佐八の羯鼓踊」の例などに見られるように非常に困難で、危機的状況にある。かんこ踊りの運営も今までのままの体制・しきたりで実施し対策を講じないと、地域の高齢化・少子化のため、音頭の歌い手・踊り手不足は確実に進み、組織自体も弱体化が進み、近い将来、かんこ踊りは消滅に向かうと考えられる。

筆者は今後、早急(できれば数年以内)に対策を施す必要があると考える。以下に筆者の提言を記載する。

- ①かんこ踊りの踊り手に近い将来、女子も含める。女子が就職・結婚等で地元を離れても、そのこども(男子のみでなく女子も)が実家の地区の行事であるかんこ踊りに参加することにより、踊り手の候補者のすそ野を広げることが可能になる。まず、小学生の女子は花笠踊り/綾踊りで参加する。中学生・高校生・成人女子の本格的なかんこ踊りへの参加も認める。度会町麻加江のかんこ踊りでは、女子が綾(あや)踊りで参加している。下小俣のかんこ踊りでは、小学生の女子が花笠踊りで参加していたが、残念ながら、2024年度では参加者がいなかった。円座のかんこ踊りの踊り手は、幸いなことに2024年時点で(男子の踊り手)21名と十分な人数が確保できているが、10年後は分からない。今のうちにできることを、10年後を見据えてやっておいたほうが良い。
- ②かんこ踊りの踊り手に近隣の地区外の出身者も認める。ただし、かんこ踊りは文化的側面だけではなく、本来は地域住民の初盆供養・先祖供養という宗教的な行事であるので、この整合性を維持する必要がある。宗教行事である念仏踊りには参加せずに、後半の娯楽のためのかんこ踊りから参加という方法が考えられる。関係する寺院・神社との関係も含めてどういう解決方法があるのかを考える必要がある。
- ③かんこ踊りの踊り手以上に深刻なのが音頭の歌い手の高齢化および不足である。多くのかんこ踊りの組織では、歌い手のほとんどが高齢者であり、早急な改革が急務である。歌うことに興味がある若い人々(女子を含む)を勧誘する必要がある。音頭に女子も認める。また、音頭の練習はかんこ踊りの公演の直前練習だけでは不十分なので、数ヶ月前からの中期的な練習が必要である。
- ④かんこ踊りの音頭・衣装・道具などのデータをマニュアル化・映像化を行い、急な変化に対応できるようにしておく。
- ⑤シャグマの保管を2カ所以上に分散する。シャグマが火災等で焼失・損失した場合、今の形でのかんこ踊りは実施できなくなる。
- ⑥現代の若者にとって、かんこ踊りで踊ることは魅力的でないようである(度会町麻加江のかんこ踊りに参加してきた大学生との話)。ポジティブなイメージを持ってもらうために、日常的な広報活動が必要になる。例えば、地区の保育園/幼稚園/小学校に出向いて、デモンストレーションやかんこ踊りの体験会を行う。地区の小学校の運動会/文化祭で小規模なデモンストレーションを行う。かんこ踊りが「カッコイイ」と感じさせる活動が必要である。
- ⑦横のつながりの構築: 三重県では多くの地区でかんこ踊りが行われている。まず、「宮川流域かんこ踊り協議会」的なものをつくり、情報交換を行う。共通な問題で困っている可能性がある。解決方法の議論やノウハウの交換も可能である。このためには、行政と積極的に連携する。三重県・市町村のサポートが非常に必要である。一例として、行政のホームページ・広報誌などにかんこ踊りの特集を組んでもらうなど。
- ⑧情報発信の構築および強化: YouTubeなどのSNSを積極的に使って発信する。特に重要な点は、地域の若い人が制作・情報発信を主導する(そのために組織の変更を行う)。内容についても、若者目線の制作が必要である。

願わくは、佐八のかんこ踊りが早期に再開し、宮川流域のかんこ踊りがさらに100年以上続きますように。

参考資料

- 1) 中西智子 「かんこ踊りの研究(Ⅰ)ーかんこ踊りの文化的背景ー」、『三重大学教育学部研究紀要』、教育科学、第52巻、p.149-157、2001年。三重県および三重県外のかんこ踊りの学術的な考察が記載されている。
- 2) 坂本昌美 「羯鼓踊」、2012年、(円座町羯鼓踊保存会)。平成24年度円座町羯鼓踊保存会会長による解説、A4で1ページのみ。
- 3) 「かんこ踊り」、『盆踊りの世界』、<https://www.bonodori.net/kanko>、(参照2023-10-22)。三重県南部の伊勢・志摩地方の念仏踊りと北部の伊賀地方の雨乞踊りに分類している。歴史などの説明もある。
- 4) 沼木まちづくり協議会 「円座の羯鼓踊」、P1-10、2024年、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>。円座の羯鼓踊について、詳しく解説している。円座の羯鼓踊は毎年8月15日の午後6時半ごろから円座町の正覚寺(曹洞宗)の境内で行われる。
- 5) 「麻加江かんこ踊り」、『平成18年度 ふるさと文化再興事業 松阪伊勢地域伝統文化伝承事業』、(企画:松阪伊勢地域伝統文化伝承事業実行委員会、三重県教育委員会)。DVD(3つのDVDファイル、計44分25秒)および解説リーフレット6ページから成る。麻加江のかんこ踊りは毎年8月15日に慶林寺(けいりんじ、曹洞宗)で行われている。演目は、順に「大名行列」(明治以降)、「入り場付(いりばつけ)」(踊りの最初の入端(いりは)の曲)、「場付(ばつけ)」、「御所踊り」、「敷(しき)あや(かんこあや)」、「念仏踊り」、「綾(あや)踊り」から成る。音頭は「出し」と「受け」の二手に分かれて掛け合いで唄う。念仏踊りは初盆供養、先祖供養および戦没者の霊、三界万霊のための踊りである。念仏踊りでは、輪の中央でシャグマを被った踊り手が太鼓を打つ。また鉦(かね)も加わる。他の踊りは地区住民の楽しみのための踊りである。綾踊りでは綾子(あやこ)と呼ばれる少女(幼稚園児から小学生)とシャグマを被った踊り手4名が参加。麻加江では シャグマは10体あり、個人で保管している。
- 6) 「円座の羯鼓踊」、『平成18年度(2007年3月) ふるさと文化再興事業 松阪伊勢地域伝統文化伝承事業』、(企画:松阪伊勢地域伝統文化伝承事業実行委員会、三重県教育委員会、制作:株式会社CNインターボイス)。一般鑑賞編、DVD(2つのDVDファイル、計27分43秒)および解説リーフレット12ページ(佐八(そうち)の羯鼓踊を含む)から成る。漢字は「羯鼓踊」ではなく、「羯鼓踊」が使われた。佐八の羯鼓踊は8月15日、16日の両日に長泉寺(曹洞宗)に面する佐八町公民館の前庭で行われてきた。
- 7) 小俣町編 「第二項 かんこ踊り」、『小俣町史 通史編』、第十一節 芸能、p.894、昭和63年、(小俣町)。小俣町下小俣のかんこ踊りは慶蔵院(浄土宗)の境内で毎年8月15日に行われている。練習は下小俣公民館の前庭で実施。(2024年8月11日、練習を見学させていただいた時):腰蓑(シモタ)は毎年、新調していない。小学生の女子が花笠踊りに参加していたが、2024年では希望者がいなくて花笠踊りは実施できなかった。残念!
- 8) 伊勢市編 「6円座の羯鼓踊」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第9章 民俗文化財、第1節 民族行事、p.532、平成19年、(伊勢市)。
- 9) 五来 重 『踊り念仏』、平凡社ライブラリー241、1998年、(平凡社)。五来重(ごらいしげる)は仏教民俗学者。かんこ踊りについて詳しい説明がある(p.185-198)。かんこ踊りは京都の「やすらい花」の系譜をひくと説明している。
- 10) 「文化財ー円座の羯鼓踊」、『三重の文化』、文化財データベース、(三重県)、<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp>、(参照2023-10-21)

作成責任者:沼木まちづくり協議会 立花和也

2024年12月12日

沼木まちづくり協議会

住所:〒516-1104 三重県伊勢市上野町823 (旧沼木中学校)

TEL:0596-39-7240 FAX:0596-39-7241 メールアドレス:info@numakijin.com ホームページ:<https://numakijin.com>